

上

山田

Yamada Tomohiko

智彦

天狗 藤吉郎

天狗藤吉郎

上

山田智彦

やまだともひこ
山田智彦——1936年に横浜に生まれる。早大卒業後、東京相互銀行（現東京相和銀行）に入行。現在、作家業を主体として活躍、同行顧問も務める。純文学から歴史小説、経済小説に至る幅広いジャンルで健筆を揮っている。主要著書は、『水中庭園』（毎日出版文化賞）、『人間関係』『蒙古襲来』『義経の刺客』『銀行頭取』『銀行合併』『頭取の首』『偽りの帝国』『銀行消失』『第三の取締役』『秀吉暗殺』など多数。

てんぐとうきやうろう
天狗藤吉郎（上）

著者——やまだともひこ
山田智彦

編集人——岡野敏之

発行人——伏見 勝

発行所——読売新聞社

〒100 55 東京都千代田区大手町一の七の一

〒530 大阪市北区野崎町五の九

〒802 北九州市小倉北区明和町一の一

〒460 名古屋市中区栄一の一七の六

印刷所——明和印刷株式会社

製本所——大口製本印刷株式会社

第一刷——一九九五年（平成七年）二月十六日

第二刷——一九九五年（平成七年）三月十日

ISBN4-643-95005-6 C0093

©1995, Tomohiko Yamada

Printed in Japan

乱丁・落丁本はお取り換えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

天
狗
藤
吉
郎

上

目
次

上

山の民

7

還俗

27

伊吹の姫

42

尾張の里

68

嫁の値打ち

97

神隠し

116

木曾谷

144

義理の父	161
野盗	188
松下加兵衛	219
清洲へ	239
武家奉公	268
出世の糸口	298
利家の受難	345
その前夜	369

下	
桶狭間	7
妹君	48
美濃へ	79
嫁取り	120
一夜城	168
新しい道	249
落城	295
京への道	351
あとかき	

装丁 重原保男

天
狗
藤
吉
郎

上

山の民

旅の僧が一人、山道を行く。

比叡山の東の麓から登り始めて、丁度一時（二時間）ほどになる。

僧の額には汗の粒がびっしりと並んでいる。そろそろひと息入れねばと思つて休む場所を探した。手頃な石か切株が欲しいところだ。

その時のことである。

山が鳴った。

「や！」

思わず周囲を見廻した。

「山鳴りか、それとも猿の群れの移動であろうか？」

と呟いた僧は編笠を取つて左手に持ち換えた。

両の眉毛が白く染っている。かなりの老僧だが、足腰はしっかりしていた。ずっと登り坂なのに息はきらしていない。

「あるいは？」

と口に出して、首をひねる。

「久しく耳にせなんだ音よのう」

言いながら、立ち止まって肩で息をする。腰の竹筒を傾けて、二口、三口水を飲んだ。

「あ、甘露じゃ」

満足気に漏らして、また歩き始めた。

さらに一時ほど進んだ時、先程耳にしたばかりの物音が近付いてきた。

「はて、奇妙なことよのう。日に二度も山鳴りを聞くとは」

と言つて、足を止めた。ざわめきの音はしだいに大きくなり、老僧の前方五間ほどのところでぴたりと止まった。

黒装束の者たちがおよそ七、八名、地に伏していた。

老僧はにやりと笑った。

「お迎えに参上いたしました」

一人が進み出て言う。

「しばし遅れましたること、お許し下されませ」

とつけ加える。

「うむ、何かあったか？」

と老僧は訊く。

「およそ一時半ほど前に、怪我人が出ました」

「怪我人とな？ 誰じゃ？」

「弥右衛門にござりまする」

と男は答えた。

「弥右衛門がどうした？ 傷は深いのか？」

と身を乗り出した。

「命に別状はござりませぬ。なれど」

「何じゃ？」

「火を吐く鉄の棒にて、左脚を斬られておりまする」

「火を吐く鉄の棒じゃと？」

「はい、近くで見えておった者がおりまする」

「して、下手人は？　しかと捕えたのじゃな」

と念を押す。

「それが、まんまと取り逃がしました」

口惜し気に齒齧はがみをする音が聞こえた。

「なに、取り逃がしたのか？」

老僧の眼が光った。

「はい」

屈強の男が片膝ついて答えた。

「久しぶりに帰ってみると、この騒ぎじゃ。しかも、狼藉者ろうぜきには逃げられておる」

「申し訳ござりませぬ」

先頭の男がそう言うと、集まった七、八名の黒装束がいつせいに頭を下げた。

「まあ、よい。出迎えご苦労であった」

老僧は一同をねぎらった。

「まず本堂へ行く。ご神体に帰り着いた挨拶をせねばならぬ」とつけ加える。

「は」

一同は平伏するや、散った。

老僧は再び歩き始めた。

いつの間にか、黒装束の男たちの姿は消えている。周囲は何ごともなかったかのように静まり返った。

「弥右衛門の傷、おそらく尋常な刀傷ではあるまい」と呟いた。

「火を吐く鉄の棒じゃと？ たわけたことを言いおって」と口では言ったが、老僧の表情は引き締まっている。

世の中が騒がしゅうてならぬ。

それであつた。

応仁元年（一四六七）に始まった応仁の乱以来、世は乱れ、足利幕府の權威は地に墮ちてしまった。各地に盜賊が跋扈し、飢饉が襲いかかり、一揆が起こつて混乱は深まるばかりである。

下剋上の世となり、各地で有力な大名や守護、地頭などが蜂起し、おのれの力で国を奪い盗ろうとした。子が親を裏切り、兄弟が殺し合う。血が血を呼び、世は乱れた。こうして戦国時代に突入していったのである。

史書では、北条早雲の関東進出をもつて戦国時代の始まりとしている。

だが、現実には、あちこちで騒乱が起き、わけがわからぬうちに戦火が広がつていったのだ。農民たちも自衛し、一揆を起こして結束した。家門の誉れや、氏育ちにはかわりなく、知恵と力無き者たちは、あえなく屍となつて土地や財産を奪われた。

相模、武蔵、下総と勢力を拡大しつつある北条のみではなく、駿河の今川、甲斐の武田、近江の浅

井、越前の朝倉、越後の長尾、安芸の毛利、奥州の伊達、土佐の長宗我部等々の権力大名たちが近隣の小国を切り取ってはおのれの領国を増やしていった。

「雨降って地固まる」とは言うても、なかなか」

老僧は山道を登りながら、また口の中で呟いた。

世はまだまだ動くと思つたのである。

やがて老僧は山中の盆地に建立された社の前に着いた。

俗に、「日吉神社」と呼ばれている。

比叡山東麓にあるこの大社には古くから山王権現がまつられており、延暦寺の鎮守であると信じられてきた。

ために、天台宗の僧侶たちによって手厚く保護された。

また、この地は「日吉山王」の名でも親しまれ、熊野や出羽の羽黒山などと共に霊峰として崇められ、山伏たちの修行のルートにもなった。

ちなみに、山伏とは山の中で密教の呪法を修する験者のことで、始祖は役小角だと言われている。

弁慶はもと出羽の修験者であつたという。そうであれば、熊野の別当増を頼り、比叡山に出入りしていたのも頷ける。義経が西海で破れ、奈良の吉野山系へ逃げ込み、追手の裏をかきながら奥州の藤原王国へ辿り着けたのも、弁慶のよく知る山伏の道なくしてはどうてい考えられない。

ともあれ、室町時代の末期から戦国時代にかけて、彼らは諸国を遍歴した。もともと、霊峰と言われている山々を巡るのが山伏たちの修行でもあつた。

源平時代でも、それに続く鎌倉時代でも彼等の活動はなかなか活発で、その足跡を探ることはまず出来なかつた。とはいえ、当時はまだ役小角以下の伝統が重んじられ、宗教的な色彩が濃く、彼等の動きそのものが謎に包まれていたのである。

しかし、戦国時代に入ると、それも薄らいだ。

諸国での群雄割拠がこれに拍車をかけたとも言えよう。

有力大名や武将たちが争って彼等を召し抱えた。健脚で知恵があり、躰もいたって丈夫で、しかも山伏姿や僧体で諸国をめぐる。これこそ、まさに密偵にうってつけではないか？

それに、戦国の大名たちは情報収集の必要性にせまられていた。他国の状況をいち早く知る。そこに、生き残る道があった。

領国を増やすも減らすも、的確な情報収集によるところが多い。おのれの命も、一族の命運も懸かっているとなれば、すぐれた密偵の採用こそ急務と言えた。

言い換えれば、山伏たちは世の乱れに乗じて仕事を増やし、大金を掴む機会を得たのである。どうやら老僧は、こうした修験者や山伏たちを取り締まる立場にいる人物らしい。

大社の中に入ると、大勢の僧や山伏たちが出迎えた。姿を改めたのか、黒装束の者など一人もいない。

「師の御坊」

と中心に跪ひざまずいている僧が呼びかけた。

「お帰りをお待ち申しておりまいた」

丁重に頭を下げた。

老僧は日吉権現のご神体の前で、深く頭こうべをたれて帰社の報告をすませた。

茶を一服喫して、ひと息いれた後、

「誰かある。弥右衛門の伏せっておる所へ案内せい」と命じた。

「では、これへ」

身の軽い山伏の一人が先に立った。

弥右衛門は裏手の庫裡くらりのひとつで横になっていた。

老僧が居間に入ると、病人は身を起こそうとした。

「まて、そのままでよい」

と押しとどめる。

「これは師の御坊」

弥右衛門はもがいた。

「これ、聞きわけのない。傷にひびく。じつとしておれ」と声を強めた。

「ははっ」

と病人は頭をたれた。

「不覚でござりました」

「うむ。そちほどの男がのう」

老僧はゆつくりと顎あごをさすった。

「何者じゃ？」

「それが、わかりませぬ」

と弥右衛門は正直に答えた。

何を隠したとて見抜かれてしまう。老僧の眼力にはとても対抗出来なかった。

「不意を襲われて、傷を負わされ、あげくに逃げられたそうじゃの」

「面目しだいもござりませぬ」

弥右衛門は身を揉もんだ。

「そのことはもうよい。言うたとして詮せんないことよ。それより、火を吐く鉄の棒にて斬られたと言うたな？」

と訊く。

「はい、なれど」

と彼は口ごもった。

果たして、斬られたと言ってよいのかどうか、判断に苦しんだのである。

「どれ、傷口を見せよ」

と老僧は身を乗り出した。

「はっ」

答えて、左脚を前に出す。少し動かしただけでも痛むので、思わず顔をしかめた。

「ひどく痛むのか？」

「なんのこれしき」

と弥右衛門は強ががりと言った。

老僧は病人の傷を仔細しさいに調べた。

膝と足首の間あたりに小さな木の実ほどの穴が開いている。なにがこのような穴をうがつたのかはよくわからぬ。だが、どうやら、左脚の骨のその部分が打ち砕かれてしまったらしい。

「なんとも奇妙じゃなあ。まるで物の怪けの仕業のようじゃ」

老僧は思わず唸うなった。

老僧が思わず唸ったのを見て、弥右衛門は不安になった。

「この傷を受けた時の様子を、いま一度くわしゆう言うてみなされ」

師は促した。